

冷え切った山風が肺に染みこんでくる。生きることは息を吸うことだ。だから私たちは世界の温度をいつも肌だけでなく、胸の中でも感じ取っているはずだ。だが午前六時、山中湖畔で身体の内側から感じた気温は、どうしようもないくらい新鮮だった。雄大な自然に出会ったとき、人はどのような感情を抱くだろうか。カントの言う崇高のように、圧倒され、何も感じ取れなくなってしまうような感情だろうか。私は人間が自然と絡みついていることを思い知らされた。それは人間が単純に自然を支配しているとか、自然が人間を圧倒しているといった関係性ではなく、嘘が真実を必要としながら真実とは正反対の性質を持つように、性質を異にしながらそれぞれの存在のために互いを必要とする関係である。

山中湖畔に存在する「富士癒しの森」は東京大学が管理する演習林だ。1925年11月に設立されて以降、保健休養林として地域・研究者・学生に開かれてきたこの場所は、自然と人が交わる営みを実践する場所でもある。そこではわずか数人の職員が、広大な敷地の森林を維持している。ある自然環境を人為的に維持するのは相当難しいことだ。例えば日本で現在問題となっている放棄竹林による竹害などは、たった数か月竹林が放置されただけで、あっという間に竹が増殖し、ほかの植物の生育阻害や土砂災害、獣害の原因となってしまう。こうした困難を抱える自然環境の維持は、だが管理や支配といった言葉ではその本質をつかめないものだ。むしろ合気といった言葉の方が近いかもしれない。自然がどのように変化しようとしているのか、その動向に気を巡らせ、自然にとっても人間にとってもよい環境を作ろうと心がける。都市に暮らす私たちが時計の示す時間に合わせて行動するように、こうした林の維持に関わる生活では、自然の時間に合わせて行動する。訪問した際には、ストーブの燃料にする薪棚が乾燥させるため外に積み上げられていた。冬という時間が単なる季節としてではなく、生活に浸透する時間としてそこでは確固として存在していた。

夜には、寮内の設備を利用して東大全共闘における三島由紀夫のドキュメンタリーを視聴した。時間的・空間的に都市から隔絶された場所で、数十年前の歴史に触れる体験は格別なものだった。歴史に触れるとき、私たちはそれがいかに現代に接続するののかという視点と、現代に生きる私たちが持つ価値観を一時的に切り離す技法の両方を意識しなければならない。そうした意味で山中湖という空間はこれ以上ない場所だった。大学という空間がかつてこれほどまでに自由な言論のための空気を持っており、その気運の渦を他ならぬ学生が作り上げていたという事実は、新型コロナウイルスで大学という空間に全く足を踏み入れたことがない時期と、そこから大学という場所が盛り上がりなおしていく時期の両方を経験した私自身にとっていくつか思うことがあった。大学という場所はいかにして成立するのか。そしてその成立には何を必要とするのか。三島由紀夫が全共闘と議論した駒場の900番教室は、あの時代の大学の一つの在り方を体現しているように見えた。では、私たちの時代

における大学の在り方とは一体何なのか、そしてその在り方が現出する場所はいかにして成立するのか。これらの問いに確固たる答えを得るには時間が足りなかったが、大学という場所からも切り離された自然の中でこそ思考できた問いではあると思う。

濃密な一日目を終え、次の日の早朝は自転車をこぎだし、日の出の富士を見に行った。4km ほどの道を行き、山中湖と富士山が共に見える場所で眺める体験はこの上ないものだった。日常から離れた空間で、このような思考・体験ができたことは本当に貴重なことだった。企画・運営してくださった EAA の事務局・先生方に御礼申し上げることで、結びの言葉としたい。

